

認知症高齢者に対する Person Centered Care の理念に沿った支援の試み
～ 自発的行動に着目して～

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター

社会福祉は、弱者救済ということから限られた人が対象となっていた。しかし、時代が進むにつれて法整備も進み、1990年前後から弱者に対する支援の意識が、以前までは「対処する」といった受身的な姿勢であったが、「自立に向けて援助する」というように前進的な姿勢に変化してきた。

我が国は、様々な福祉分野の法整備が進められてきた。現在、児童や精神、障害者といった福祉分野も少子化や犯罪の低年齢化など様々な問題や障害により注目を浴びているが、なかでも高齢者福祉は他と比べて問題に直面する機会が多いことから関心が非常に高まっている。

現在の高齢者福祉は様々な特徴があるが、大きな特徴として、2000年に介護保険制度が施行され、事業者と利用者は契約の関係となり、支援にサービスという概念が含まれるようになり、サービスを選択することが可能になったということや認知症高齢者の増加が顕著に見られ、問題行動を含めたケアについて試行錯誤されていることが挙げられる。

認知症高齢者の現状について述べると、要介護高齢者のほぼ半数、または、施設入所者の約8割が「何らかの介護・支援を必要とする認知症(認知症性老人自立度 以上)」である。今後も増加傾向を辿ることが予測されている。また、認知症高齢者に対するサービスには、デイサービスなどの在宅サービスやグループホームなどの入所施設、様々な支援事業がある。

サービス体系の1つであるデイサービスについては、社会的交流や入浴を目的に利用されているが、サービスの差別化とともにアクティビティにも力が注がれている。

これまでの支援として、1990年前後から身体的ケアとともに精神的ケアについても取り組みを行うよう推進されてきたが、介護保険制度が始まり、事業所が企業化し、利用者の確保と最小限のスタッフ体制から利益をあげる傾向から、サービスの差別化が計られてはいるが、ケアが業務主義に傾倒していった。認知症高齢者ケアを含め、コミュニケーションが重要視されなければならない状態で逆行することとなった。

最近になり精神的ケアに少しずつ関心が向けられてきた。認知症高齢者に対する取り組みとして Person Centered Care(以下 PCC)がある。PCCは、医学的見地にのみ着目するのではなく、その他の要因であるケアの環境などを重視すべきだとし、その概念に沿ってアプローチすると「その人らしさ」が維持されるとしている。

そこで、本研究では、PCCと共通の概念をもつことから、具体的なアプローチ方法として Person Centered Approach(来談者中心療法)：(以下 PCA)」の応答技法などを参考に組み合わせることで、PCAの効果から問題に対して自発的行動が増え、問題解決に至ることが多

く実証されていることから、認知症高齢者の自発的行動の頻度が増加や問題行動の減少が起こるのではないかと予測を立て検討した。

研究は、デイサービス利用者で認知症高齢者の3人を対象者とし、比較的自由な時間である入浴待機時間の20分間を介入時間とした。セッションは1週間に1回20分とし、合計20回行った。

結果、自発的行動については3者ともに見られたが、ある一定の時期が過ぎた後、急に自発的行動が現れるようになるという特徴的傾向を示した。問題行動については、明確な減少は見られなかった。また、自発的行動が増えたと問題行動が減少するという拮抗した相互関係が見られた。

3事例に自発的行動の特徴的傾向が見られたことから、共通した要因の存在があると考えられ、それは相互作用を通じて、対象者が、自発的行動が現れる要因である受容や共感されていると感じるようになるには一定の時間を必要とするということを推測することができ、事例それぞれに、強弱はあるものの相互作用が現れていたことを考えると、対象者が受容や共感されていると感じるといったことは、介入による結果からだけでは、推論の枠を脱することはできないが、相互作用はPCCに基づく介入から始まっており、その介入の要素の中には受容や共感するということが含まれていることから可能性を認めることはできる。

本研究では、対照群を示すことができなかつたことから、PCCのアプローチのなかに含まれる介入要素の何が対象者に対して影響を与えていたのかを明確にすることができなかつた。しかし、1週間に1回わずか20分の介入により、自分の意思が強く表れる自発的行動が幾度も表れるようになったということ、また、自発的行動の中で、事例によっては「昔話」が多く見られたということから、対象者が話の聞き手を求めていることや自分の体験を話したいという気持ちを強く持っているという欲求があることを示唆できたことから研究としての意義があり、また、その欲求に答えるための方法として、今回のアプローチにも大きな意義があると考えられる。